

道ヶ谷古墳群
調査概要

1977. 12

袋井市教育委員会

1 調査の経過

A 調査の契機

今回の道ヶ谷古墳群発掘調査は、現在袋井市久能にある袋井市民病院が老朽化したため、移転、新築する運びとなり、それについて、移転先に道ヶ谷古墳群があり、静岡県遺跡地名表に登録されていることが判明した。道ヶ谷古墳群は第1号墳～第9号墳に分布しているため、関係者と協議した結果、第1号墳は既に消滅しており、第2号墳は保存し、第3号墳・第4号墳・第5号墳の3基については、当地点でないと工事不可能となるため、やむをえず、発掘調査をする運びとなった。また他の第6号墳・第7号墳・第8号墳・第9号墳は、工事予定地に含まれないためそのまま保存することになった。

B 発掘調査の経過

調査日誌（昭和52年10月24日～昭和52年11月26日）

10月24日（月） 晴 れ 第1日

すでに下刈りの終った道ヶ谷第3号墳・第4号墳・第5号墳のうち第3号墳の平板測量を行なう。

墳丘状の最高地点で東西と南北にそれぞれ交差するように巾50cmの第1トレンチ・第2トレンチを設定する。

10月25日（火） 晴 れ 第2日

昨日の第3号墳と同じ要領で、午前中に第4号墳、午後に第5号墳の測量を終える。

場所が難所のため苦勞する。

11月14日（月） くもり 第3日

第4号墳の東西、南北に2本のトレンチを入れる。深さは約30cmで

赤色に酸化した層まで掘り下げた。巾は50cmである。出土品なし。

11月15日(火) くもり 第4日

- ・ 前日掘り終えたトレンチの断面図をとる。

東西トレンチの南側断面と南北トレンチの東側断面を測図する。

- ・ 第5号墳の東西・南北に2本のトレンチを入れる。深さは約50cmで巾は50cmで粘土層まで掘りさげる。土質は、第4号墳よりはやわらかく砂利土である。出土品なし。

11月16日(水) 雨 第5日

雨のため、室内で図面の整理をする。

午後から、太谷純仁先生に袋井市に関したことの話を聞きに行く。

11月24日(木) 晴れ 第6日

- ・ 第3号墳の東西・南北に2本のトレンチを入れる。深さは約50cmで巾は50cm。出土品なし。
- ・ 第5号墳のトレンチ断面図をとる。

11月25日(金) 晴れ 第7日

- ・ 第5号墳の断面図の続きを行なう。
- ・ 第3号墳のトレンチ断面図をとる。

11月26日(土) 晴れ 第8日

第3号墳の断面図の続きを行なう。

2 道ヶ谷古墳群の位置

国鉄東海道線袋井駅から北北西へ直進する主要地方道袋井春野線は駅から500mの位置で、原野谷川をこえ200mの位置で、国道1号線を横ぎり、さらに北へ1,500m進んだ地点で県道可睡～久能線を北北東へ派出してY字型をなす。このY字型をなす。

このY字型の北側には、樹枝状に開析された屋根が北から南へのびているが、その南端は、切断されて、県立袋井商業高等学校が建てられている。その北方背後の少し曲がりくねった屋根の稜線上には、墳丘状の地ぶくれが何ヶ所もあり、それが道ヶ谷古墳群と名付けられている。

注1 この屋根の地籍は、字清ヶ谷に属し、「堂ヶ谷」は、清ヶ谷の北方に位置する地域である。

しかし、「静岡県遺跡台帳」には、「道ヶ谷古墳群」として登録されているのでこれに従った。実際は清ヶ谷の地名を冠すべきであろうか。

3 道ヶ谷第3号墳

第3号墳は、第2号墳の北方20mに位置する。

角のまるいひし形に近い平面図でその南につづく稜線が標高37mであるのに対し、最高地点で、37.475mを測るのみの、すなわち比高40cmをわずかにこえる地ぶくれである。道路による踏みかためを考慮しつつ、高見のはば中央部で交差する南北方向と東西方向の巾は50cmのトレンチを掘った。

樹根の網の目がはりめぐらされた表土層の厚みは6cm～12cmで、その

下層は黄かっ色混砂れき層で、わずかに有機質が浸透している。厚みは15 cm～25 cmである。その下層は、東北側には、黄色砂層が横たわり西南側は、黄色れき層で共に有機質のない自然層である。その下部には、ほぼ水平に、かたくしまった混砂れき層があり、その上面は赤かっ色に鉄分が酸化して、全くの自然層で、地ぶくれ全体に人為的なほりこみはなく、従って遺物も全く認められなかった。すなわち、自然の地ぶくれそのものであった。

4 道ヶ谷第4号墳

第4号墳は、第3号墳の東北50 mに位置する。

不整だ円形の地ぶくれで、西南方向からは墳丘のごとくにも見えるが、北北東へつらなる屋根筋は、標高39.5 mであるのに対し、最高地点は39.89 mすなわち40 cmたらずの高さにすぎない。そのふくらみも中央で直交するように東西方向および南北方向の巾50 cmのトレンチを掘った。地質全体がわずかに砂をまじえたれき層であるが、上表部の厚さ約5～10 cmにはわずかに有機質が浸透し、やややわらかい。しかしその下層は茶かっ色の混砂れき層で、ツルハシがはねかえるほどかたく、厚さ約25～30 cmで酸化鉄の多い赤茶けた面に達し、かたさはいよいよしまっている。全面的に自然層で人為的なほりこみは全くなく、もちろん遺物も出土しなかった。すなわちこの地点も自然地形の高まりであった。

5 道ヶ谷第5号墳

第5号墳は、第4号墳の北方20mに位置する。

かつては不整な隅円平行四辺形であつたらしいが、このたびの測量時には、すでに南東側のふくらみの中ばを失っていた。西側を南北に通る山道が標高40mであるが、ふくらみの最高地点は、41.328mである。すなわち1mをこえる高さをもつ。しかし標高41.25mをえがく隅円円型は狭小で古墳の墳丘の頂とはみなしがたく、西北側並びに東北側の等高線は、はなはだ不整な形をえがく。そして切断された東側断面をみると、下部は白色粘土層で、その上部に混砂れき層が北から南へ傾斜しつつななめのしまをなしており、人為層はみえず、上表部はしだ類の根でおおわれている。そして西側の道路を平らに切り通した部分に、白色粘土層が水平に露出していた。

最高地点で直交するように南北方向並びに東西方向に巾50cmのトレンチを掘ったが、人為的な堀り下げは全くみられず遺物も何ら出土しなかった。すなわちこの地点も自然の地ぶくれであった。

6 む す び

このたび発掘調査した結果道ヶ谷第3号墳・第4号墳・第5号墳と名付けられていた3ヶ所の地ぶくれは、いずれも古墳ではなく自然地形の高まりであることが明らかとなった。